防衛研究所 National Institute for Defense Studies
NIDSコメンタリー
第 463 号　2026 年 11 月 20 日

ウクライナ侵攻におけるロシア軍諸兵科連合戦闘の適応と限界

――作戦環境の変化と実行条件の再構成

政策研究部軍事戦略研究室長　寺内　真寿[1]

はじめに

2022 年 2 月に開始されたロシア軍によるウクライナへの全面侵攻は、冷戦後最大規模の国家間戦争であり、ロシア軍に大規模な損失をもたらすとともに、同軍の諸兵科連合戦闘が、その基本原則に基づいて現代戦環境においてどの程度有効に機能するのかを検証する契機ともなった[1]。

本稿における分析の出発点となるのは、2022 年 2 月 24 日の全面侵攻開始から同年春季までの戦闘において、ロシア軍が長年維持してきた諸兵科連合戦闘（общевойсковой бой）が、なぜその能力を十分に発揮できなかったのか、そして、その背景には戦闘を遂行するための条件にどのような問題が存在したのかという点にある。

本稿では、侵攻初期における諸兵科連合戦闘の機能不全と、戦争の進展に伴うロシア軍の適応を分析する。なお、本稿でいう「実行条件」とは、諸兵科連合戦闘を成立させるために必要な組織的、人的、技術的及び情報・戦場環境上の条件を指す。

ロシア軍の定義によれば、諸兵科連合戦闘は、打撃・火力・機動を中核とし、目的・場所・時間に応じて調整された形で遂行される戦闘様式であり[2]、各兵科・部隊が相互に協同して行動することをその基本原則の一つとする[3]。この思想はソ連軍の縦深戦理論の影響を受けて発展した。縦深戦理論とは敵の防御を戦術的・作戦的縦深にわたって打撃し、敵戦力の組織的崩壊を追求する作戦思想であり、諸兵科連合戦闘は火力と機動を統合し、この構想を戦術レベルで具体化する戦闘様式として位置づけられてきた[4]。

ロシア軍はソ連邦崩壊後もこの諸兵科連合戦闘の思想的基盤を維持し、2000 年代以降の軍改革において大隊戦術群（BTG）を整備した。BTG は大隊を基幹とする任務編制型の諸兵科連合部隊であり、砲兵、防空、工兵、電子戦などの支援要素を統合することで、戦術レベルにおける高い自立性と独立した戦闘行

[1] 本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。

動能力を備えることが期待されていた[5]。しかし、ウクライナ侵攻初期の戦闘経過は、BTG を基盤とする諸兵科連合戦闘を十分かつ継続的に遂行することが困難であったことを示している。その要因を考える上では、諸兵科連合戦闘という概念自体の妥当性だけでなく、それを実戦において具体化するために必要な編制、人的能力、指揮統制及び技術的基盤が、侵攻初期の戦場において十分に機能していたのかを検討する必要がある。

また、戦争の進展に伴い、UAV や各種 ISR の利用が拡大し、部隊の集結や機動が従来以上に探知・攻撃されやすい戦場環境が形成されていった。こうした情報環境の変化は、戦力集中と縦深への機動を重視するロシア軍の諸兵科連合戦闘に新たな制約を与えることとなった[6]。したがって、ロシア軍が侵攻初期に経験した諸兵科連合戦闘の機能不全を検討する際には、編制、人的能力及び指揮統制上の問題を中心に分析した上で、その後に顕在化した戦場環境の変化との関係についても検討する必要がある。

そこで本稿は、まず、ロシア軍における諸兵科連合戦闘の基本原則を整理し、2022 年の侵攻初期における機能不全の実態と、その実行条件を阻害した要因を検討する。次いで、戦争の進展に伴うロシア軍の戦術的適応を分析する。その上で、侵攻初期にみられた限界が諸兵科連合戦闘の基本原則そのものの問題なのか、それとも現代戦の環境下で実行条件が十分に整わなかったことによるのかを考察する。

ロシア軍における諸兵科連合戦闘の基本原則

ロシア軍の諸兵科連合戦闘とは、目的・場所・時間に応じて調整された形で遂行される戦闘様式であり[7]、複数の兵科・部隊が相互に協同して行動することをその基本原則の一つとする[8]。この概念は、ロシア軍が重視してきた作戦構想を戦術レベルの具体的な戦闘行動へ反映する枠組みとして機能している。そして、その思想的背景には、敵の戦術的・作戦的縦深に同時又は連続的な打撃を加え、敵戦力の組織的崩壊を追求するソ連軍の縦深戦理論がある。諸兵科連合戦闘は、縦深戦理論の構想そのものと同一ではないものの、火力と機動を統合し、敵の防御を突破してその縦深へ戦果を拡張するための戦術レベルの主要な実行手段として発展してきた[9]。

ロシア国防省発行の 2005 年版『戦闘規定第 3 部』によると、現代の諸兵科連合戦闘は、高強度かつ迅速で動的な戦闘行動、地上・航空領域にわたる戦闘、双方の戦闘隊形の全縦深に対する同時かつ強力な火力及び電子的作用、多様な戦闘任務遂行方法の適用及び複雑な戦術状況を主要な特徴としている[10]。また、諸兵科連合戦闘では、各兵科・部隊の行動と火力及び電子戦等を時間的・空間的に調整し相互の協同を維持することが重視されている[11]。攻撃は火力と機動を組み合わせて実施され、攻撃に先立って火力準備が行われる。また、敵防御が十分に制圧された場合には、戦車は味方砲兵の砲撃に続いて攻撃する[12]。砲兵

は攻撃火力準備を通じて敵を制圧し、戦車・自動車化狙撃兵部隊の前進を支援する[13]。さらに、工兵部隊は障害物処理や通路開設等を担う[14]。このような各兵科・部隊の活動を時間的・空間的に調整することによって、諸兵科連合戦闘が成立するとされる。

また、ロシア軍教育機関で使用される戦術教範である『一般戦術：大隊・中隊』の著者、セルゲイ・アナトーリエヴィチ・バチュシキン少将は、この教範の中で諸兵科連合戦闘を、目的・場所・時間について組織され、調整された打撃、火力及び機動によって遂行される戦術行動の基本的形態として説明している。そして諸兵科連合戦闘は、各軍種・兵科等の協同した努力により、統一された構想及び計画に基づき、諸兵科連合指揮官の統一指揮の下で遂行されるとしている。さらに、打撃、火力及び機動を戦闘の重要な構成要素として位置づけ、機動についても場所・時間・目的に応じた調整と、実施する部隊間の確実な連携を重視していると指摘する[15]。このことから、兵科・部隊間の協同を成立させるためには、各部隊・兵科の行動を時間的・空間的に調整し、その連携を維持する指揮統制が重要になると整理できる。

また、バチュシキンは、現代の諸兵科連合戦闘の主要な特徴として、高強度かつ迅速で動的な戦闘行動、地上・航空領域にわたる戦闘、敵側戦闘隊形の全縦深に対する同時かつ強力な火力及び電子的作用、多様な戦闘任務遂行方法の適用、戦闘行動の種類の迅速な転換、複雑な戦術状況を挙げている。さらに、現代の諸兵科連合戦闘の傾向として、部隊の分散化、異なる戦闘機能を有する戦力・手段を組み合わせた戦闘隊形の統合度の向上、部隊の自立性及び戦術的独立性の増大、情報交換能力の向上を指摘している。このことから、電子戦及び情報共有も、火力や機動とともに、現代の諸兵科連合戦闘を実行する上で重要な機能として位置づけることができる[16]。

ロシア軍は、これらの原則を実践するための編制として BTG を整備してきた。BTG は大隊を基幹としながら砲兵、防空、工兵及び電子戦要素を付加した任務編成型の戦闘単位であり、高い機動性と即応性を備えることを目的としていた[17]。しかし、BTG が諸兵科連合部隊として有効に機能するためには、編制上各種の能力を保有するだけでなく、それらの行動を調整し、協同させることが必要となる。前述したように、諸兵科連合戦闘では、各軍種・兵科等の行動を相互に調整し、その協同を維持することが求められる。このため、各部隊の行動を時間的・空間的に調整する指揮統制と、そのための通信及び情報共有は重要な実行条件となる。したがって、実戦における諸兵科連合戦闘を評価する際には、基本原則そのものの妥当性だけでなく、それを成立させるための条件が戦場でどの程度満たされていたのかを検証する必要がある。

以上から、ロシア軍の諸兵科連合戦闘が有効に機能するためには少なくとも、①火力と機動の時間的・空間的な調整、②歩兵、機甲、砲兵、防空、工兵及び電子戦の協同、③安定した指揮統制と通信、④これらを運用できる人員及び部隊編制が必要であると整理できる。

次項では、以上の条件を評価基準として、侵攻初期におけるロシア軍の戦闘実態から、諸兵科連合戦闘の基本原則と実際の運用との隔たりを明らかにし、諸兵科連合戦闘の実行条件がどのように阻害されたのかを分析する。

侵攻初期における諸兵科連合戦闘の機能不全

2022 年侵攻初期、ロシア軍は複数方向から同時に攻勢を実行し、短期間でウクライナの指揮中枢を麻痺させる作戦を企図した。この作戦は、航空優勢の確保、迅速な地上部隊の前進及び諸兵科連合による戦力集中を前提としていた。しかし、作戦遂行の過程では、諸兵科連合の各要素を適切に運用するための能力に問題がみられた[18]。また、部隊内・部隊間の協同にも問題がみられ、実戦の厳しい条件下では協同や部隊の一体性が損なわれる傾向にあり[19]、戦闘規定に示された諸兵科連合戦闘を十分かつ継続的に遂行することは困難であった。この機能不全が諸兵科連合戦闘の基本原則の限界によるものなのか、それともその実行に必要な諸条件が十分に成立しなかったことによるのかについては、両者を区別して検討する必要がある。

キーウ州ホストーメリをめぐる作戦は、侵攻初期におけるロシア軍の諸兵科連合戦闘の機能不全を示す一つの事例であった。空挺部隊は先行して投入されたものの、後続の地上部隊は計画された前進を十分に実施できず、先行した部隊の一部は主力から離れて孤立する状況に陥った[20]。こうした戦闘経過は、先行する空挺部隊と地上部隊及び後続部隊との行動を時間的・空間的に連携させることが困難であったことを示しており、前項でみた諸兵科連合戦闘の成立条件である部隊間の協同と指揮統制に問題が生じていたことを示唆している。

戦術レベルにおいても、BTG を中核とする諸兵科連合戦闘には課題がみられた。ロシア軍の BTG は砲兵や機甲戦力を重視した編制であった一方、下車戦闘を実行する歩兵戦力は限定的であった。そのため、市街地や複雑地形において機甲部隊を十分に支援することが困難であり、戦車や装甲車両はウクライナ軍の対戦車部隊による待ち伏せ攻撃に対して脆弱性を示した。また、砲兵火力との調整も必ずしも円滑ではなく、火力と機動を時間的・空間的に調整し、歩兵と機甲部隊を連携させながら戦闘を遂行するという諸兵科協同の実行に課題がみられた[21]。

防空・電子戦能力は存在していたものの、侵攻初期にはこれらの支援機能と地上部隊の機動との協同が十分ではなく、各種能力を一体的に運用することに課題がみられた[22]。これは、各種の能力を保有していることと、それらを諸兵科連合戦闘の中で実際に連接して運用できることが必ずしも同義ではなかったことを示している。

こうした侵攻初期の戦闘経過からは、ロシア軍が諸兵科連合戦闘を実行する上で、編制上の問題だけでなく、火力、機動及び各兵科の行動を相互に調整するための人的能力、指揮統制及び通信にも課題が存在していたことがうかがえる。これらの問題は、諸兵科連合戦闘の基本原則である各兵科・部隊の協同を実戦において具体化することを困難にする要因となった可能性がある。

指揮統制面では、下級指揮官による主導性の発揮が限定され、上級指揮官の状況判断や正式な命令を待つことで、意思決定が停滞する場合があることが指摘されている[23]。また、階層的な指揮統制の下では、新たな試みや組織上の変更に上級者の承認を要する傾向も指摘されている[24]。侵攻初期のように状況が急速に変化する戦場では、こうした特徴が迅速な意思決定や兵科間の調整を困難にした可能性がある。

以上のように、侵攻初期におけるロシア軍の戦闘では、火力と機動の調整、兵科・部隊間の協同、指揮統制及びこれらを支える部隊編制など、諸兵科連合戦闘の複数の実行条件に問題が認められた。次項では、これらの実行条件を阻害した具体的要因について検討する。

諸兵科連合戦闘の実行条件を阻害した要因

2022 年侵攻初期においてロシア軍の諸兵科連合戦闘に機能不全が生じた要因としては、主として①BTG の構造的制約、②人的・訓練・指揮統制上の問題が挙げられる。これらは、前項で整理した諸兵科連合戦闘の実行条件を編制面及び人的・組織面から制約した。一方、戦争の進展に伴って UAV や各種 ISR の利用が拡大すると、部隊の集結や機動が従来以上に探知・攻撃されやすくなるなど、諸兵科連合戦闘をめぐる作戦環境そのものも変化していった。以下では、まず侵攻初期の実行条件を阻害した要因を検討し、その上で、戦争の進展に伴う作戦環境の変化について考察する。

（1）BTG の構造的制約

BTG は、砲兵、防空、工兵、電子戦などの支援能力を大隊規模に統合し、高い即応性と戦術的自立性の確保を目的とした任務編成型の戦術単位であった。一方、限られた規模の部隊に複数の支援機能を集約したことで、歩兵を含む兵力構成や支援機能の運用に一定の制約を抱えていたと指摘されている[25]。

歩兵戦力の不足は侵攻初期の戦闘で特に深刻な影響を及ぼした。BTG では火力支援能力が強化される一方、地形確保、敵歩兵との接触及び機甲部隊の近接防護を担う歩兵戦力が限定されていた。そのため、機甲部隊と歩兵の協同が成立しにくく、とりわけ市街地や複雑地形における諸兵科連合戦闘の実行が制約された。強力な砲兵・機甲戦力を保有していても、歩兵が地形を確保し機甲部隊を防護できなければ、火力による制圧を継続的な前進へ結び付けることは困難であった[26]。

また、BTG が砲兵、防空、電子戦などの能力を編制上保有することは、それらを実戦で有効に連接できることを意味しなかった。侵攻初期には、これらの支援機能を前進する地上部隊と連携して十分に運用することに課題がみられた[27]。こうした制約は、限られた兵力の下で即応性と火力を重視し、大隊規模の部隊に多様な機能を集約しようとした軍改革の方向性とも関係していたと考えられる。したがって、BTG の構造的制約は、歩兵戦力の不足と、多様な支援機能を大隊規模で協同させることの困難さにあり、前項で示した「各兵科の協同」と「それを実行できる部隊編制」という二つの条件を同時に制約したと整理できる。

（2）人的・訓練・指揮統制上の問題

ロシア軍は徴兵制と契約兵制度を併用してきたが、BTG を充足する契約兵、とりわけ自動車化狙撃部隊の人員は不足していた。諸兵科連合戦闘は、砲兵、機甲、歩兵、工兵、防空及び電子戦部隊を時間的・空間的に連携させる高度な調整能力を必要とするため、経験豊富な契約兵や下級指揮官の不足は、単なる兵員数の問題にとどまらず、兵科間協同を実行する能力にも影響した。また、諸兵科連合戦闘には、各兵科が個別の任務を遂行するだけでなく、共通の状況認識の下で行動の時機と場所を調整する訓練が必要となる。このため、人員不足や練度の不均衡は、BTG が編制上保有する各種能力を実際の戦闘効果へ転換することを困難にした[28]。

また、ロシア軍では強い指揮官権限や階層的統制などの制度的特徴が指摘されている[29]。下級指揮官には予期しない状況において自ら主導性を発揮することへの制約がみられ、上級指揮官による状況判断や正式な命令を待つことで意思決定が停滞する場合がある[30]。こうした階層的な組織文化の下では、新たな試みや組織上の変更には上級者の承認を要する傾向が指摘されている[31]。このような指揮統制上の特徴は、変化する戦場環境に応じて現場指揮官が火力、機動及び各兵科の行動を迅速に再調整する上での制約となり、諸兵科連合戦闘に必要な協同を阻害した可能性がある。

さらに、侵攻初期には安全な通信手段の不足が指摘され、一部部隊では携帯電話などの民生用又は秘匿性の低い通信手段への依存も報告された。こうした通信上の問題は情報共有と命令伝達を不安定にし、各兵科の行動を時間的・空間的に調整することを困難にしたとされる[32]。

以上のように、経験を有する人員や下級指揮官の不足、階層的な指揮統制、通信の不安定性は相互に作用し、BTG が保有する各種能力を一体的な戦闘行動として機能させることを困難にしたものと考えられる。

（3）情報環境の変化

戦争の進展に伴い、UAV や各種 ISR の利用が拡大し、部隊の集結や機動が探知・攻撃されやすい戦場

環境が次第に形成されていった。こうした戦場監視能力の向上は、戦力集中と突破後の縦深への機動を重視する諸兵科連合戦闘にとって新たな制約となった。すなわち、情報環境の変化は火力と機動の統合そのものを不可能にしたのではなく、その実行に必要な秘匿、集中及び行動の自由に対して、従来以上に厳しい条件を課すこととなった[33]。

このような作戦環境の変化は、侵攻初期に明らかとなったロシア軍の問題とは区別して捉える必要がある。侵攻初期の機能不全では、BTG の歩兵不足、兵科間協同の不全、人的能力、指揮統制・通信上の問題が主要な制約として顕在化した。その後、UAV や各種 ISR の利用拡大によって戦場の透明性が高まると、こうした既存の問題に加えて、部隊の集結、機動及び火力発揮を敵の監視・攻撃下で実行するという新たな課題への対応が求められることとなった。

この環境下では、電子戦、対 ISR、分散、秘匿及び情報共有などの機能を、火力や機動とどのように連接するかが、諸兵科連合戦闘の実行にとって一層重要となる。このことは、諸兵科連合戦闘の実行条件が不変ではなく、敵の能力や戦場環境の変化に応じて再構成される必要があることを示している。

ロシア軍による UAV、電子戦、対 ISR 及び火力運用等の適応は、こうした新たな環境の下で諸兵科連合戦闘の実行条件を再構成しようとする動きとして捉えることができる。次項では、侵攻初期に明らかとなった問題と、その後の作戦環境の変化に対して、ロシア軍が戦術及び部隊運用をどのように適応させたのかを検討する。

ロシア軍の戦術的適応と諸兵科連合戦闘の基本原則の持続性

侵攻初期の戦訓を受け、ロシア軍は戦術及び部隊運用のレベルで一定の適応を示した。なかでも顕著なのは、火力と偵察の連接を強化し、敵を消耗させながら漸進的に戦果を拡大する戦闘様式への移行である。ロシア軍は砲兵火力の運用を変化させ、射撃の時機や効果を重視するとともに、攻撃を準備するウクライナ軍部隊や防御陣地に対する火力発揮を継続した[34]。こうした変化は、戦場監視能力が向上する中で、偵察と火力の連接を強化し、敵戦力を継続的に消耗させることを重視した適応として捉えることができる。

侵攻初期の経験は、BTG が一定の戦術的能力を有する一方、継続的な諸兵科連合戦闘を遂行する編制として制約を抱えていたことを示した。その後、ロシア軍は BTG 中心の運用を修正し、戦列歩兵、突撃歩兵、専門歩兵等を機能別に組み合わせた任務別編成を重視するようになった。これは、侵攻初期に明らかとなった歩兵不足や兵科間協同の問題に対する適応の一形態であり、複数の兵科・機能を大隊規模で

協同させることの困難さを反映したものと考えられる[35]。

一方、ロシア軍は UAV と砲兵火力の連接を進めた。UAV 等による偵察情報を砲兵火力へ迅速に結び付ける仕組みは、火力発揮の反応性と柔軟性を高め、短時間での交戦を可能にした[36]。この変化は、偵察、情報共有及び火力の連接を強化する適応であり、戦場監視能力が向上した環境の下で、諸兵科連合戦闘の実行条件の一部を再構成する動きと捉えることができる。

しかし、こうした戦術的適応にはなお限界があり、火力運用や UAV 活用の進展が直ちに作戦レベルの成功につながるものではない。ロシア軍の適応の多くは既存の不足を補うための反応的なものであり、異なる機能の調整にはなお構造的な問題が残ると指摘されている[37]。

これらの適応は主として戦術的・技術的領域に認められるものであり、それだけで諸兵科連合戦闘の基本原則そのものの大幅な変更を意味するものではない。公開されているロシア軍事専門誌等を分析した研究によれば、ロシア軍幹部は、ウクライナで明らかになった問題を認識しながらも、諸兵科連合戦闘という作戦概念を放棄していないとの指摘がある[38]。むしろ、兵力規模、指揮統制、部隊編制、対 ISR 及び火力制圧能力を改善することによって、将来の戦争における機動能力を回復しようとしている[39]。したがって、火力運用、UAV の活用及び部隊編制にみられる戦術的・技術的変化と、諸兵科連合戦闘の基本原則そのものの変化とは区別して検討する必要がある。

ロシア軍幹部は、対 ISR、電子戦、指揮統制及び火力制圧能力の強化を通じて、現代の戦場環境における諸兵科連合機動能力の回復を図る方策を提唱している[40]。また、航空作戦では、長距離精密打撃の重要性が引き続き重視され[41]、さらに、UAV 等の無人システム、ISR 及び AI を活用し、既存の作戦概念をより効果的に実行する方向が示されている[42]。これらの議論は、縦深戦理論が今日においてそのまま適用されていることを示すものではないが、火力によって敵の防御及び打撃能力を制圧し、その成果を機甲・自動車化部隊による突破と縦深への機動につなげるという考え方には、縦深戦理論との一定の共通性を見いだすことができる。

総じて、侵攻後にみられた火力運用、UAV の活用及び部隊編制の変化は、諸兵科連合戦闘の基本原則そのものの放棄ではなく、変化した戦場環境の下で、その実行条件を再構成する適応として捉えることができる。

おわりに

本稿は、2022 年のウクライナ侵攻初期におけるロシア軍の戦闘様式を分析し、諸兵科連合戦闘の基本

原則と実際の戦闘との隔たりを検討した。侵攻初期のロシア軍は、火力、機動、防空、工兵及び電子戦等の兵科・機能間の協同を十分に成立させることができず、諸兵科連合戦闘を十分かつ継続的に遂行することが困難であった。その背景には、BTG の構造的制約、人的・訓練上の問題及び指揮統制・通信上の問題など、諸兵科連合戦闘の基本原則を実戦で具体化するための実行条件上の制約が存在していた。

また、戦争の進展に伴う UAV や各種 ISR の利用拡大は、部隊の集結や機動が従来以上に探知・攻撃されやすい作戦環境を形成し、諸兵科連合戦闘の実行に新たな制約を加えた[43]。こうした情報環境の変化は、侵攻初期に顕在化した機能不全の直接的な原因とは区別して捉える必要があるが、その後のロシア軍に対し、戦力集中、機動、情報共有、電子戦及び火力運用等に関わる実行条件を、変化した戦場環境に適応させることを求める要因となった。

こうした問題に対し、ロシア軍は部隊編制を見直すなど、戦術面での適応を進めた[44]。また、火力運用を変化させ、UAV と砲兵火力の連接を強化するなど、技術面及び運用面でも適応を進めた[45]。しかし、これらの変化は、直ちに諸兵科連合戦闘という作戦概念そのものの放棄を意味するものではない。ロシア軍幹部は、ウクライナで明らかになった問題を認識しながらも、諸兵科連合戦闘という作戦概念を放棄していないとの指摘がある[46]。

以上の検討を踏まえると、侵攻初期における諸兵科連合戦闘の機能不全は、諸兵科連合戦闘の基本原則そのものの限界というよりも、編制、人的能力、指揮統制及び通信等、その基本原則を実戦で具体化するために必要な条件、すなわち「実行条件」が十分に整っていなかったことに主として起因すると考えられる。

この点は、現代戦におけるロシア軍の諸兵科連合戦闘のあり方を考える上でも重要である。戦力集中や機動が探知・攻撃されやすい環境では、その有効性を基本原則そのものの妥当性だけで判断するのではなく、火力と機動の連接、兵科間協同、指揮統制・通信、UAV・ISR・電子戦への適応といった実行条件を含めて検討する必要がある。今後は、こうした適応が一時的な戦時対応にとどまるのか、それとも諸兵科連合戦闘の基本原則の修正や部隊編制の再設計へとつながるのかを見極める必要がある。

[1] Jack Watling and Nick Reynolds, *Meatgrinder: Russian Tactics in the Second Year of Its Invasion of Ukraine*, Royal United Services Institute (RUSI), 19 May 2023, ii–iv. https://static.rusi.org/403-SR-Russian-Tactics-web-final.pdf

[2] Ministerstvo Oborony Rossiyskoy Federatsii, *Boyevoy Ustav Sukhoputnykh Voysk Rossiyskoy Federatsii. Chast' III: Vzvod, Otdelenie, Tank*, Moscow: Voenizdat, 2005, 4–5. https://studfile.net/preview/4457210/#4457210

[3] Ibid., 8–9.

[4] David M. Glantz, *Soviet Military Operational Art: In Pursuit of Deep Battle*, Frank Cass, 1991, 24–25. https://leftypol.org/edu/src/1739940127169-3.pdf
[5] Lester W. Grau and Charles K. Bartles, *Getting to Know the Russian Battalion Tactical Group*, Royal United Services Institute (RUSI), 14 April 2022. https://www.rusi.org/explore-our-research/publications/commentary/getting-know-russian-battalion-tactical-group
[6] Michael Petersen, Paul Schwartz, and Gabriela Iveliz Rosa-Hernandez, *Russian Concepts of Future Warfare Based on Lessons from the Ukraine War*, CNA, July 2025, 19. https://www.cna.org/reports/2025/08/Russian-Concepts-of-Future-Warfare-Based-on-Lessons-from-the-Ukraine-War.pdf
[7] *Boyevoy Ustav, Chast' III*, 4–5.
[8] Ibid., 8–9.
[9] Glantz, *Soviet Military Operational Art*, 24–25.
[10] *Boyevoy Ustav, Chast' III*, 5–6.
[11] Ibid., 8–9.
[12] Ibid., 62–63.
[13] Ibid.
[14] Ibid., 130.
[15] Sergey A. Batjushkin, *Obshchaya taktika: batal'on, rota*, Moscow: Knorus, 2017, 6–10.
https://dokumen.pub/download/9785406099377.html
[16] Ibid.
[17] Grau and Bartles, *Getting to Know the Russian Battalion Tactical Group*.
[18] Watling and Reynolds, *Meatgrinder*, 3.
[19] Ibid., 8.
[20] Jack Watling and Nick Reynolds, *Operation Z: The Death Throes of an Imperial Delusion*, Royal United Services Institute (RUSI), 22 April 2022, 3–4. https://static.rusi.org/special-report-202204-operation-z-web.pdf
[21] Michael Kofman and Rob Lee, *Not Built for Purpose: The Russian Military's Ill-Fated Force Design*, War on the Rocks, 2 June 2022. https://warontherocks.com/not-built-for-purpose-the-russian-militarys-ill-fated-force-design/
[22] Watling and Reynolds, *Operation Z*, 3–4.
[23] Juha Kukkola, *Russia's Adaptation in the War Against Ukraine (2022–2025)*, 25. https://doria.fi/bitstream/handle/10024/193189/Adaptation%20of%20Russian%20Armed%20Forces_Kukkola_web.pdf?sequence=2&isAllowed=y
[24] Ibid., 40.
[25] Grau and Bartles, *Getting to Know the Russian Battalion Tactical Group*.
[26] Kofman and Lee, *Not Built for Purpose*.
[27] Watling and Reynolds, *Operation Z*, 3–4.
[28] Kofman and Lee, *Not Built for Purpose*.
[29] Kukkola, *Russia's Adaptation in the War Against Ukraine (2022–2025)*, 40.
[30] Ibid., 25.
[31] Ibid., 40.
[32] Sam Cranny-Evans and Thomas Withington, *Russian Comms in Ukraine: A World of Hertz*, Royal United Services Institute (RUSI), 9 March 2022. https://www.rusi.org/explore-our-research/publications/commentary/russian-comms-ukraine-world-hertz
[33] Petersen et al., *Russian Concepts of Future Warfare*, 19–20.
[34] Watling and Reynolds, *Meatgrinder*, 11–12.
[35] Ibid., Executive Summary, i–iv.
[36] Ibid., 12–13.
[37] Ibid., 29.
[38] Petersen et al., *Russian Concepts of Future Warfare*, 15.
[39] Ibid., 21.

[40] Ibid., 21–28.
[41] Ibid., 60–61.
[42] Ibid., 66–70.
[43] Petersen et al., *Russian Concepts of Future Warfare*, 19–20.
[44] Watling and Reynolds, *Meatgrinder*, Executive Summary, ii–iv.
[45] Ibid., 11–13.
[46] Petersen et al., *Russian Concepts of Future Warfare*, 15.

PROFILE

寺内　真寿

政策研究部　軍事戦略研究室研究室長

専門分野：軍事戦略等

NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直　通：03-3260-3011
代　表：03-3268-3111（内線 29177）
防衛研究所 Web サイト：www.nids.mod.go.jp